

すももの花の国から

小川未明

青空文庫

ひとびと
人々のあまり知らないうところでありました。そこには、ほとんど、かずかぎりのないほどの、すももの木がうわっていました。そして、春になると、それらのすももの木には、みんな白い花が、雪のふったように咲いたのであります。

その木の下をとおると、いい匂いがして、空の色が見えないま
でに、白い花のトンネルとなつてしまいました。それは、あまり
に白くて、清らかなので、肌が、ひやひやするようにおもわれた
のであります。

しかし、ゆけども、ゆけども、白い花のトンネルはつきま
せませんでした。まるで、白い雪の世界をあるいているようなもので
した。

けれど、雪ではありません。雪は、真つ白であります。すももの花は、いくぶん、青みがかつていて、それに、いい匂いがしました。

しまいには、どこが出口やら、また、入つて、あるいてきたところやら、わからなくなつてしまいました。すると、そのすももの林のなかに、一軒のわら屋がありました。その家には、しらがのおばあさんと、三人の姉弟がありました。いちばん上の姉は、十四で、つぎの妹は、十二で、下の弟は、八つばかりでありました。

この三人は、ほかにお友だちもなかつたから、姉弟で、なかよくあそんでいました。

「お父さんや、お母さんは、いつになつたらかえつていらつしやるだろう？」と、妹と弟は上の姉さんにむかつてたずねたのです。すると、姉さんは、やさしい目をして二人を見ながら、

「私だつて、かすかに、お母さんのかおや、お父さんの顔をおぼえているばかりなのよ。春の晩方のこと、こうして、すももの花の咲いたじぶんに、みんながランプの下で、たのしく、お話を

したことだけをおぼえているのよ。」と、姉さんはこたえました。

二人は、ぼんやりとしたかおつきをして、姉さんのいうことをきいていましたが、

「お父さんは、どこへいかれたのだろう……。」と、弟がいます。

「お母^{かあ}さんは、どこへおいでになつたのでしよう……。」と、妹^{いもうと}がたずねました。

すると、姉^{ねえ}さんが、

「お父^{とう}さんも、お母^{かあ}さんも、街^{まち}のほうへおいでになつたのよ。それは、街^{まち}は、きれいなんですつて。そして、いろいろな花^{はな}が、もつと、もつと、ここよりか美^{うつく}しく咲^さいているということですよ。」

「ここよりか?」

「ここには、白^{しろ}い花^{はな}ばかりですけど、街^{まち}へゆけば、紅^{あか}い花^{はな}や、青^{あお}い花^{はな}や、黄^{きいろ}色^{いろ}い花^{はな}が、咲^さいているといいいます。」

「ぼくも、街^{まち}へいつてみたいな。」と弟^{おとうと}がいました。「あたし

も……。」と妹がいました。

「わたし私だつて、いつてみたいことよ……。もしや、お母さんや、お父さんにあわれないものでもないから。」と、姉がいました。

そこで、三人は、おばあさんのいなさるところへやってきました。おばあさんは、子供たちの着物のほころびをつくろつていられました。

姉弟は、街へゆきたいということを、おばあさんに話しますと、おばあさんは、

「おまえたちは、このすももの花の林を世界として、生まれてきたのだから、もし、あちらの街へゆくようなら、みんな、そのすがたでは、ゆかれません。そして、もし、あちらの街へいつてし

まえば、お父さんや、お母さんのように、もう二度とこのすももの花の国へ、かえつてくることができな^{はな}いかもしれない。よくよくかんがえてからになさい。」といわれました。

三人は、^{にん}氣をつけてゆきます。そして、お母さんや、お父さんをさがして、きつとふたたび、この家へかえつてくるから、どうか、やつてくださいとたのみました。

「それほどまでにいうなら、三人の姿をかえて街のほうへ、とんでゆけるようにしてあげよう……。」と、おばあさんはいわれました。おばあさんは、ふしぎな術を知^{じゆつ}っていました。それですぐに、いちばん年上^{としうえ}の姉^{あね}をちように、妹^{いもうと}を蛾^がに、末^{すえ}の弟^{おとうと}をみつばちにしてしまったのです。

「さあ、三人は、なかよく、たがいにたすけあい、気をつけてとんでおゆき。」と、おばあさんはいわれました。黄色なちようと、白い蛾と、かわいらしいみつばちの、三人の姉弟は、白いすももの花の国からたびだつて、あちらの街のあるほうを指してとんでいったのです。街には、公園がありました。また、街の郊外には、花園がありました。そして、そこには、かつて見たことのないような、美しい花が咲き乱れました。

三人の姉弟は、それらの花を一つ一つおとずれて、美しい色をながめ、みつをすつて、また香いに酔いながら、楽しく、春のどかな日をおくつたのであります。いちばん上の姉さんのちようは、あとの蛾とみつばちにいろいろの注意をしました。そ

して、三人がはなればなれにならないように、とんだのでありま
した。三人は、こうして、たのしい日をおくるうちにも、お母さ
んや、お父さんに、どうかしてめぐりあいたいとおもっていまし
た。また、ふるさとのすももの園とおばあさんのこともわすれる
ことができませんでした。ある日の晩方、美しい、花よりも、
もつとみずみずしい赤い燈火を、三人は目のまえに見ました。

「あすこに、お母さんや、お父さんが、いなされはしないか。」
と姉がいつて、三人はそのほうにとんでいきました。

その燈火の下には、男の子や、おじいさんや、また、いろいろ
の人たちが、あつまつて話をしていました。

しかし、三人の、お父さんや、お母さんはいないので、引き返

してさらにあちらの花壇かだんのほうへいって、やすらかな眠りねむりに、つこうとしました。

——一九二五・二作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷

底本の親本：「兄弟の山鳩」アテネ書院

1926（大正15）年4月19日

※表題は底本では、「すももの花《はな》の国《くに》から」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：栗田美恵子

2019年12月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すももの花の国から

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>